

東常縁書写「仮名文字遣（定家書）」について

「老いのくりごと」清水忠夫著より

（前略）

文安五年二月廿三日書之。

此双紙以証本不違一字書写之。

依左衛門尉藤原氏保所望經年月者也。

真実早筆之躰多し。

平常縁（花押）

（この双紙は証本を以て一字違わずこれを書き写す。

左衛門尉藤原氏保所望年月を経るものに依るなり。

「左衛門尉藤原氏保所望に依って年月を経る者也。」

真実に早筆の躰多し。）

郡上へは何度も訪れ、前から気にはなっていたのだが、一昨年（平成二十一年）はじめて鷺見城址を訪ねることができた。もうとても登ることはできなかったが、「鷺見城要図」には、山頂に、本丸のほかに、西の丸、東の丸、矢場や馬場もあり、実に立派な中世の山城であった。本丸の入り口の大手門のあたり、西・北・南には川が流れ、自然の要害になっている。この城は鷺見頼保によって築城され、約四百年間、鷺見氏の居城であったと伝える。私はそれ以来ここに住む鷺見氏の文化のことを考えていたのである。東氏の居城篠脇城のあった郡上市大和町の北に、白鳥町があり、長滝寺という白山信仰の中心の寺院があって、鷺見郷は、その東に位置する。長滝寺には、古くからの延年を今に伝えている。白鳥の文化が、郡上の中でも、大和や八幡などとは一味違って、東氏の文化というよりは、白山信仰が中心を占めていることには気づいていたのだが、その白鳥の文化と鷺見氏との関係も今後は考えてゆくべき課題であ

ろうと思う。東氏も、永祿二年（一五五九）に常慶・常莞が、常慶の女婿遠藤盛数によって追放されて滅亡するが、その遠藤氏の常友が東氏の文化を顕彰することにより、東氏の文化は今日に知られる。一方、鷺見氏の場合は、多くの謎に包まれていて、その解明がむつかしいのである。根本資料と関連資料、多くの伝承などから、資料吟味をふまえて、事実と推論を明確に区別して客観的な検討を加えてゆかねばならないが、中世、美濃国の最北部にあって、鷺見氏が一つの文化を形成していたことは、今後ぜひ顕彰されなければならないであろう。

この常縁の「仮名文字遣」の奥書から少なくとも見えてくるものは、東常縁とともに鷺見氏保もまた和歌などの文芸に深い関心をもち、互いに文芸好きの武将仲間として、親しい関係であったことである。井上氏が早くから言われている常縁の確実な伝記資料の最初であるということ、は、こうした背景を考えて見る必要があると思うのである。それに、常縁が早くから「仮名文字遣」に深い関心を持っていたことも知られて興味深い。

（この「仮名文字遣」というのは、藤原定家が同音のかなの使い分けを定めたもので、常縁はそれを写した。その写は佐賀県立図書館鍋島文庫にあるという。文安五年というのは常縁は関東へ行く前であり、東氏の中枢には居なかったと思われる。）

なお鷺見氏保は記録によると文安元年に死去しているが、奥書を見ると、以前に氏保から頼まれたものだが、今は手元にあると読むこともできる。
令和六年八月釋文隆書く